

8/14 Sat.

大成建設 Presents 読響サマーフェスティバル2021
《三大協奏曲》東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
YNSO SUMMER FESTIVAL 2021 "THREE GREATEST CONCERTOS",
presented by Taisei Corporation / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin
チェロ
Cello
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

小林資典 -p.6
MOTONORI KOBAYASHI
石上真由子 -p.8
MAYUKO ISHIGAMI
北村 陽 -p.8
YO KITAMURA
角野隼斗 -p.9
HAYATO SUMINO
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] -p.11
Violin Concerto in E minor, op. 64
I. Allegro molto appassionato - II. Andante -
III. Allegretto non troppo - Allegro molto vivace

チェロ協奏曲 口短調 作品104 [約40分] -p.12
Cello Concerto in B minor, op. 104
I. Allegro
II. Adagio ma non troppo
III. Allegro moderato

ピアノ協奏曲 第1番 変口短調 作品23 [約32分] -p.13
Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23
I. Allegro non troppo e molto maestoso - Allegro con spirito
II. Andantino semplice
III. Allegro con fuoco

8/18 Wed.

大成建設 Presents 読響サマーフェスティバル2021
《三大交響曲》東京芸術劇場コンサートホール 18時30分開演
YNSO SUMMER FESTIVAL 2021 "THREE GREATEST SYMPHONIES",
presented by Taisei Corporation / Tokyo Metropolitan Theatre 18:30

指揮
Conductor
コンサートマスター
Concertmaster

シューベルト
SCHUBERT

ベートーヴェン
BEETHOVEN

[休憩]
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

小林資典 -p.6
MOTONORI KOBAYASHI
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

交響曲 第7番 口短調 D759 《未完成》 [約25分] -p.14
Symphony No. 7 in B minor, D759 "Unfinished"
I. Allegro moderato
II. Andante con moto

交響曲 第5番 ハ短調 作品67 《運命》 [約31分] -p.15
Symphony No. 5 in C minor, op. 67
I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro - IV. Allegro

交響曲 第9番 ホ短調 作品95
《新世界から》 [約40分] -p.16
Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"
I. Adagio - Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：大成建設株式会社
助成：文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業
事業提携：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

 大成建設
For a Lively World

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：大成建設株式会社
事業提携：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

 大成建設
For a Lively World

8/23 Mon.

第644回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.644 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
チェロ
Cello
コンサートマスター
Concertmaster

カバレフスキー
KABALEVSKY

ショスタコーヴィチ
SHOSTAKOVICH

[休憩]
[Intermission]

ショスタコーヴィチ
SHOSTAKOVICH

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.7
SEBASTIAN WEIGLE
イサン・エンダース -p.9
ISANG ENDERS
長原幸太
KOTA NAGAHARA

歌劇〈コラ・ブルニョン〉序曲 [約5分] -p.17
"Colas Breugnon" Overture

チェロ協奏曲 第2番 ト短調 作品126 [約33分] -p.18
Cello Concerto No. 2 in G minor, op. 126
I. Largo
II. Allegretto – III. Allegretto

交響曲 第5番 ニ短調 作品47 [約44分] -p.19
Symphony No. 5 in D minor, op. 47
I. Moderato
II. Allegretto
III. Largo
IV. Allegro non troppo

8/28 Sat.

第239回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.239 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

8/29 Sun.

第239回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.239 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

モーツァルト
MOZART

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

[休憩]
[Intermission]

ベートーヴェン
BEETHOVEN

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.7
SEBASTIAN WEIGLE
戸澤采紀 -p.10
SAKI TOZAWA
長原幸太
KOTA NAGAHARA

歌劇〈フィガロの結婚〉序曲 [約4分] -p.20
"Le nozze di Figaro" Overture

ヴァイオリン協奏曲 イ短調 作品53 [約32分] -p.21
Violin Concerto in A minor, op. 53
I. Allegro ma non troppo – II. Adagio ma non troppo
III. Finale : Allegro giocoso ma non troppo

交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉 [約31分] -p.15
Symphony No. 5 in C minor, op. 67
I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro – IV. Allegro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
文芸春秋 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
文芸春秋 独立行政法人日本芸術文化振興会

8/14
三大協奏曲

8/18
三大交響曲

Maestro

指揮

小林資典

MOTONORI KOBAYASHI, Conductor

劇場たたき上げの
実力者が振る
読響・夏の名曲選！



©Gerardo Garciano

本場ドイツの歌劇場で培われた、類いまれな感性と実力を発揮する俊英が「読響サマーフェスティバル」で初登場。《三大協奏曲》では3人のソリストを盛り立てる。

1974年千葉県生まれ。東京芸術大学および同大学院で指揮法をF.トラヴィス、遠藤雅古^{まさひさ}に師事。また、サントリーホール・オペラアカデミーに参加し、同ホールオペラ公演ではG.クーンらのアシスタントを務めたほか、二期会などの公演でも副指揮と合唱指揮を務めた。98年に平和中島財団奨学生、その後文化庁海外派遣研究員として渡独、ベルリン芸術大学でM.フスマンに師事した。

2000年からライン・ドイツ・オペラでコレペティトゥーアおよび音楽アシスタント、通奏低音奏者も務める。08年、ドルトムント歌劇場の専属指揮者として契約し、13年から現在まで、同歌劇場の音楽総監督代理と第1指揮者（カペルマイスター）の任にある。現在、ドイツの主要劇場において、第1指揮者以上の要職にある唯一の日本人指揮者として活躍。モーツァルト作品をはじめ、R.シュトラウス〈ばらの騎士〉〈アラベラ〉、ヴェルディ〈オテロ〉〈椿姫〉、グラス〈アクナーテン〉など多彩な演目で成功を収めている。

20年には、P.コンヴィチニー演出のオーペール〈ポルティチの娘〉（新制作）を指揮して注目を浴びた。近年は、ベルリン・コーミッシェ・オーパー、マンハイム国民劇場、ヴッパータール響などに客演。日本では、18年に大阪響に客演して成功を収めたほか、19年にバレエ・アム・ラインの日本公演での〈白鳥の湖〉で好評を博した。

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ

（常任指揮者）

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

“闘争から勝利へ”
名匠が熱い魂を込める
〈革命〉&〈運命〉



©読響

オペラとコンサートの双方で活躍が目覚ましい本格派。〈革命〉の愛称を持つシヨスタコーヴィチの交響曲第5番を中心としたロシア・プログラムのほか、得意のドイツ物からベートーヴェンの不朽の傑作〈運命〉などを振る。

1961年ベルリン生まれ。82年からベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者として活躍後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者に転向。2003年にフランクフルト歌劇場でR.シュトラウス〈影のない女〉を振り、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、ベルク〈ヴォツェック〉やワーグナー〈タンホイザー〉など数々の名演奏を繰り広げた。07年から11年までバイロイト音楽祭にてワーグナー〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉を指揮し、世界的注目を浴びた。08年からフランクフルト歌劇場音楽総監督の任にある。11年に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に選ばれ、15年、18年、20年にも同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。

これまでに、メトロポリタン歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場などに客演を重ねるほか、ザルツブルク音楽祭にも出演、また、ベルリン放送響、ウィーン響などを指揮し、国際的に活躍している。読響には16年8月に初登場。オペラでは19年の東京二期会のR.シュトラウス〈サロメ〉（第28回三菱UFJ信託音楽賞受賞）、今年2月のワーグナー〈タンホイザー〉などで共演し、いずれも好評を博した。

8/23
名曲

8/28
土曜マチネー

8/29
日曜マチネー

Maestro



©Kohán István

ヴァイオリン

石上真由子

MAYUKO ISHIGAMI, Violin

規格外の才能で、医学を学ぶも音楽に身を捧げる気鋭のヴァイオリニスト。京都市生まれ。8歳でローマ国際音楽祭に招待される。日本音楽コンクール第2位、ルーマニア国際音楽コンクール優勝など受賞多数。これまでに東京響、京都市響、仙台フィル、大阪フィル、ブラショフ国立響などと共演するほか、欧米各地の音楽祭に出演している。2018年に京都を中心に室内楽を行うEnsemble Amoibeシリーズを立ち上げ、各地で公演を行う。今年5月、東京オペラシティでの「コンポージウム2021」でデュサパン作品を演奏し、絶賛された。京都市芸術新人賞、大阪文化祭賞奨励賞、音楽クリティック・クラブ賞奨励賞、青山音楽賞青山賞を受賞。日本コロムビアよりソロCDが好評発売中。読響初登場。https://mayukoishigami.com/



©平鐘平

ピアノ

角野隼斗

HAYATO SUMINO, Piano

ジャンルを超えた活動で異彩を放つ新時代のピアニスト。1995年千葉県生まれ。2018年のピティナ特級グランプリ受賞をきっかけに本格的に音楽活動を開始する。19年リヨン国際コンクール第3位。これまで国立ブラショフ・フィル、日本フィルなどと共演。18年に渡仏し、音響音楽研究所(IRCAM)で音楽情報処理を研究するほか、J=M.ルイサダらに師事。20年に東京大学大学院を卒業し、国内外でコンサート活動を行う傍ら“Cateen”^{かていん}名義で自ら作編曲および演奏した動画をYouTubeで配信し、人気を博している。昨年12月、アルバム「HAYATOSM」(eplus music)をリリース。今年6月にブルーノート東京に、7月にはTBS系テレビ「情熱大陸」に出演した。今年のショパンコンクールに挑戦中。読響初登場。

2017年の第10回若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクールで優勝した新星。2004年兵庫県生まれ。9歳でオーケストラと初共演。これまでに小林研一郎、大友直人、藤岡幸夫、A. フェーヘルらの指揮で東京響、東京フィル、関西フィル、大阪フィル、兵庫芸術文化センター管などと共演している。18年5月、ロシアで開催されたチャイコフスキー国際青少年フェスティバルに招待された。堤剛、山崎伸子、太田真実、G. ケオシヴィリに師事。21年、霧島国際音楽祭賞受賞。使用楽器は、上野製薬株式会社より貸与されている1668年製「カッシーニ」。18年度の芸劇×読響ジュニア・アンサンブル・アカデミーを修了。読響には、昨年11月に井上道義の指揮で共演して以来、2度目の登場。



チェロ

北村 陽

YO KITAMURA, Cello

世界の巨匠や一流オーケストラと共演する若き実力者。バロック音楽から古典、ロマン派、現代音楽まで幅広いレパートリーを持つ。ドイツ史上最年少となる20歳でドレスデン国立歌劇場の首席奏者に就任し、4年間在籍。首席指揮者のルイーザやティーレマンの下で腕を磨いた。その後、ソリストとしてエッセンバツハ、メータ、チョン・ミョンフン、ヴァイグレらの指揮でベルリン放送響、フランス放送フィル、フィルハーモニア管、ソウル・フィルなどと共演。またシトコヴェツキー・トリオのメンバーとしてウィグモア・ホール、コンサートヘボウ等に出演している。最新盤はマラン・マレからメシアンまで4世紀にわたるフランス音楽を取り上げた「Vox Humana」(ベルリン・クラシックス)。読響シリーズ公演初登場。



©StudioBOB

チェロ

イサン・エンダース

ISANG ENDERS, Cello

8/28

土曜マチネー

8/29

日曜マチネー

Artist



ヴァイオリン

戸澤采紀

SAKI TOZAWA, Violin

2016年の日本音楽コンクールで最年少(15歳)優勝した新鋭。2017年ティボール・ヴァルガ国際コンクール第2位(最高位)など数々のコンクールで入賞。これまでに、ローザヌ室内管、東京都響、東京フィル、東京シティ・フィル、日本フィルなどと共演している。チェルカトーレ弦楽四重奏団のメンバーとしても活躍。NHK-FMラジオ「リサイタル・ノヴァ」、BSテレ東「エンター・ザ・ミュージック」に出演。

現在、玉井菜採^{なつみ}、ジェラルド・プーレに師事。江副記念リクルート財団第48回奨学生。使用楽器は、文京楽器の協力で英ペアーズ国際ヴァイオリン協会より貸与された「マッテオ・ゴフリラー」。東京芸術大学に宗次徳二特待奨学生として在学中。読響とは20年8月以来、2度目の共演。

メンデルスゾーン

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

ドイツ初期ロマン派の作曲家フェリックス・メンデルスゾーン(1809～47)が、短い生涯における円熟期に完成した代表作。ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキーの諸作と並ぶ人気ヴァイオリン協奏曲である。

メンデルスゾーンは1838年、常任指揮者を務めるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターで友人のフェルディナント・ダーヴィトのために構想を開始した。しかし創作は難航し、ダーヴィトの助言を仰ぎながら、1844年によりやく完成。翌年3月、ダーヴィトの独奏、病気療養中の作曲者に代わるニルス・ゲーゼの指揮により初演された。

本作の主な特徴は、まずホ短調の調性(前記3人の曲はヴァイオリンがよく響くニ長調)、そして全楽章が切れ目なく演奏される点と、従来は第1楽章の最後に置かれ、内容も奏者任せだったカデンツァが、中間部に移された上、すべて楽譜に記された点にある。雰囲気^{かんじ}の継続と一貫した曲調を企図したこれらの発想は、当時のヴァイオリン協奏曲としては革新的だった。

曲は、古典的な均整美と甘美なロマンティシズムが溶け合った名品。優美でありながらも憂いや力強さを併せ持ち、何より旋律の美しさは比類がない。また独奏はほとんど休みなく弾き続け、名人芸的な技巧を随所で披露する。

第1楽章 アレグロ・モルト・アパッシオナート 管弦楽による主題提示部がなく、独奏が2小節目から登場する点も斬新。そこで弾かれる有名な第1主題と、木管が出す穏やかな第2主題を中心に淀みなく展開され、ファゴットの持続音で次楽章へ移る。**第2楽章** アンダンテ 叙情的な歌が流れゆく八長調^{かんじょ}の緩徐楽章。中間部は短調に変わり、荘重な趣が漂う。**第3楽章** アレグレット・ノン・トロポ～アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ 短い経過部から2つの主題を軸にしたホ長調の主部へ移り、華やかな音楽がテンポよく繰り広げられる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1838～44年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

8/14

三大協奏曲

Program Notes

ドヴォルザーク

チェロ協奏曲 口短調 作品104

チェコ国民楽派の大家アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）が残したチェロ協奏曲の最高峰。すでに国際的名声を得ていたドヴォルザークは、1892年9月、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジャネット・サーバー女史の要請を受けて渡米し、同音楽院の院長に就任した。そして現地音楽の要素と故郷ボヘミアの民俗色を融合させた、交響曲〈新世界から〉等の傑作を生み出した。しかし望郷の念が募る彼は、1894年11月から95年2月にかけて、同郷のチェロ奏者ヴィーハンから望まれていたこの協奏曲を作曲し、4月に帰国してしまう。本作は手直しを経て1895年6月に完成。翌年ロンドンにて初演された。

曲は、哀愁に充ちた雄大かつ情熱的な音楽。大規模な構成の中に、高まる郷愁を反映したボヘミア的な情感が横溢している。特徴的なのが協奏曲には稀なほどシンフォニックな管弦楽。複数の主題をクラリネットが提示し、弦楽器の協奏曲での使用は稀なトロンボーンとチューバが重心の低い響きを作り出すなど、管楽器の活躍も目覚ましい。独奏は存分に技巧的ながら、明確なカデンツァはなく、管弦楽との一体感や音楽の流れが重視されている。

なお第2楽章中間部の訴えるような主題は、初恋の女性ヨゼフィーナ（妻の姉）が好んだ歌曲「ひとりにして」に拠っており、1895年5月の彼女の死に際して、第3楽章終結部にも同旋律が加えられた。

第1楽章 アレグロ 共に哀切な冒頭の第1主題とホルンが出す第2主題を軸にした壮大な音楽。長大な管弦楽部分に続いて、朗々と歌い且つ装飾的な独奏が縦横に展開される。

第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロップ ト長調の緩徐楽章。優しい主題が歌われる叙情的な主部に、激しさを湛えた中間部が挟まれる。

第3楽章 アレグロ・モデラート 民俗色が特に濃い終曲。力強い主要主題に二つの副主題が挟まれ、後半のしっとりした部分では第1、2楽章の主題も回想される。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1894～95年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

チャイコフスキー

ピアノ協奏曲 第1番 変口短調 作品23

ロシア最大の巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）が完成した最初の協奏曲。1874～75年という比較的初期に書かれた作品ながら、彼の3曲のピアノ協奏曲はもとより、古今の協奏曲の中でも最上位の人気を得ている。

本作は以下の経緯でも知られている。チャイコフスキーが献呈を想定していた恩人で大ピアニストのニコライ・ルビンシテインに曲を聴かせたところ、「無価値で演奏不能」と酷評されてしまう。怒った彼は、問題点の指摘に対して、「一音たりとも変更するつもりはない!」と応酬し、ドイツの巨匠ハンス・フォン・ビューローに楽譜を送付。初演はビューローの演奏旅行先アメリカのボストンで行われ、献呈もビューローになされた。ただしルビンシテインもモスクワ初演を指揮し、後にはソロも演奏するなど曲の価値を認め、一方のチャイコフスキーも2度改訂を施している。

曲は、古典的な協奏曲形式の中に、民俗的色彩と哀愁や叙情性、そして豪壮な力感が盛り込まれたスケールの大きな音楽。ピアノも華麗で技巧的なソロを繰り広げる。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロップ・エ・モルト・マエストーソ～アレグロ・コン・スピリト 全曲の半分以上を占める壮大な楽章。変二長調の長い序奏部で開始。ホルンが出す主題は印象的だが、意外にも主部には全く登場しない。主部は、ウクライナ民謡に基づくリズムカルな第1主題と哀調を帯びた第2主題を中心に、多彩な展開を遂げる。数回に及ぶカデンツァも大きな聴きどころ。

第2楽章 アンダンティーノ・センブリーチェ フルードが出す牧歌風の主題を軸にした緩やかな部分に、フランスの小唄を用いたスケルツォ風の急速部分が挟まれる。ここは全体が長調で推移する。

第3楽章 アレグロ・コン・フオーコ エネルギッシュな終曲。ウクライナ民謡に基づく躍動的な第1主題と、流麗な第2主題が対比されながら烈しく進む。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1874～75年／初演：1875年10月25日、ボストン／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

シューベルト

交響曲 第7番 口短調 D759 〈未完成〉

未完の作品でありながら、作曲者の代表作として人気を博している例はかなり珍しい。通常、交響曲は4つの楽章で構成される。しかし、フランツ・シューベルト（1797～1828）はこの交響曲を第2楽章までしか完成させなかった。第3楽章の部分的なスケッチは残っているので、少なくとも当初は第4楽章まで書くつもりがあったにちがいない。ところが、なんらかの理由でこの曲は未完のまま放置されることになってしまった。第1楽章と第2楽章のみでおおむね25分ほどの演奏時間を要することを考えれば、それまでのシューベルトの交響曲と比べて、かなり長大な作品として構想されていたことになる。もし完成していたら、はたしてこれほどの人気作になっただろうか、つい想像せずにはいられない。

もっとも、シューベルトが作品を未完のままにすることは決して珍しいことではない。番号こそついていないものの未完の交響曲はほかにも残されている。シューベルトの交響曲はそのいずれもが生前に公開演奏されていないことを考えると、むしろ演奏機会のあてもないまま交響曲のような大作を完成するほうが特別なことなのかもしれない。作曲は1822年。翌年、シューベルトはシュタイアマルクの音楽協会の名誉会員に迎えられた返礼として、未完のままの楽譜を協会に送った。なぜ未完の曲を送ったのかは不明だ。作曲者の死後、1865年になって、ようやく初演が行われた。

第1楽章 アレグロ・モデラート 地の底からわき上がるような低弦の動機で開始され、オーボエとクラリネットがメランコリックな第1主題を奏でる。チェロによる第2主題はのびやか。鬱屈^{うっくつ}した情熱をほとばしらせながら、大きなドラマを築く。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 管楽器の柔和な響きに導かれ、弦楽器が清らかな主題を奏でる。平安と苦悩を交替させながら、穏やかな終結部に向かう。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1822年／初演：1865年12月17日、ウィーン／演奏時間：約25分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン

交響曲 第5番 八短調 作品67 〈運命〉

なぜこの曲が「運命」と呼ばれるかといえば、冒頭の「ジャジャジャジャー！」（運命の動機）について、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が「運命はこのように扉を叩く」と語ったから……と古くから言われてきたのだが、近年この逸話は人気がない。この証言を伝えた作曲者の秘書シンドラーはたびたびウソをついた信用できない人物であり、逸話の信憑性^{しんぴやう}は低いとみなされているからだ。もちろん、ウソつきの言うことがすべてウソとは限らないので、本当に運命が扉を叩いている可能性も否定できないのだが。

実は「運命の動機」については別の証言もある。ベートーヴェンの弟子ツェルニー（ピアノ教本で有名だ）によれば、これはキアオジなる鳥の鳴き声に由来するというのだ。キアオジは日本ではなじみの薄い鳥だが、インターネットで動画検索すればすぐに鳴き声わかる。「チチチチー」というよりは「チチチチチ、ツィー」といった鳴き声だが、たしかに「運命の動機」によく似ている。野鳥図鑑によればキアオジは「ハンマーで叩くようなリズムで鳴く」。シンドラー説もツェルニー説も「なにかを叩いている」という点では意見が一致している。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 「運命の動機」で開始され、緊迫感あふれる楽想が展開される。「運命の動機」は全曲にわたり支配的な役割を果たす。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 通例ではゆっくりとした楽章が置かれる第2楽章だが、作曲者の指示は「コン・モート＝動きをつけて」。変奏曲形式。

第3楽章 アレグロ スケルツォ楽章。うごくめくような低音に導かれて、ホルンが「運命の動機」に基づく主題を奏でる。切れ目なく第4楽章に続く。

第4楽章 アレグロ 勝利を思わせる主題が高らかに鳴り響き、高揚感をみなぎらせる。苦悩から勝利へと至る超克のドラマが完結する。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1807～08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク

交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

「新世界」とはアメリカのこと。チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)にとって、アメリカははるか彼方の異国である。ジェット機が飛び交う現代とは異なり、19世紀末にヨーロッパからアメリカに渡るためには船による長旅が必要だった。この曲は、はるばるたどり着いた新世界から故郷に向けた一種の音の便りとでも言えるだろう。

ドヴォルザークがアメリカに渡ったのは、ニューヨークに設立されたナショナル音楽院の院長に就任するためだった。1891年、裕福な実業家の夫を持つジャネット・サーバーは、本格的な音楽院をアメリカに設立すべく、すでに国際的な名声を築いていたドヴォルザークに院長への就任を依頼した。当初、ドヴォルザークはこのオファーを断っていたが、サーバー夫人からの粘り強い説得と桁外れの高額報酬に心を動かされ、渡米を受諾する。ドヴォルザークはアメリカの黒人霊歌や先住民の音楽から新たな刺激を受け、新世界で受けたインスピレーションと祖国への望郷の念を交響曲第9番〈新世界から〉へと結実させた。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・モルト ゆったりとした序奏から、緊迫感みなぎる主部へと続く。勇ましく推進力あふれる楽想がくりひろげられる。

第2楽章 ラルゴ イングリッシュ・ホルンによる郷愁を誘うメロディは「遠き山に日は落ちて」あるいは「家路」の題で広く親しまれている。

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ エネルギッシュな民俗舞曲風のスケルツォ。中間部はひなびた民謡風。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ あたかも機関車が徐々に速度をあげて爆走するかのような開始部は、大の鉄道ファンだった作曲者ならではの。壮大なクライマックスを築くが、消え入るような最後の一音が余韻を残す。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、弦五部

カバレフスキー

歌劇〈コラ・ブルニョン〉序曲

ドミトリイ・カバレフスキー（1904～87）はサンクトペテルブルク生まれ。1906年に同地で産声を上げたショスタコーヴィチと、まさに同時代人だ。ところが両者はソ連の作曲家として、それぞれ対照的な方向へと進む。ショスタコーヴィチが国家との距離をとりあぐね、苦吟して作品を書いていた一方、カバレフスキーは体制にどっぷりと浸かることで立場を強め、音楽家生命も実際の命も長らえさせた。当時のソ連にあってはどちらの態度も、身の安全を守るために必要な選択肢である。

〈コラ・ブルニョン〉は、カバレフスキーが幹部としてソヴィエト作曲家同盟を発足させ（1932年）、モスクワ音楽院の助教授に就任し（同年）、3つの交響曲を仕上げ（32～34年）、傑作であるピアノ協奏曲第2番を世に送り出す（35年）働き盛りのころに生まれた最初のオペラだ。原作はロマン・ロランの小説で、内容は次の通り。

16世紀、ブルゴーニュ地方グラムシー村の彫刻師コラ・ブルニョンは、ジフラルドの罠にはまり恋人セリーヌを奪われ、そのとき心強い助けとなったジャクリーヌと結婚する。ジフラルドと公爵らは村で引き続き狼藉を働くが、あることが疫病までもたらす。その病によりコラの妻が死ぬ。彫刻師は上訴を決意するも、公爵の怒りを買う。それを鎮めるため立派な公爵像を彫ることを約束し、難を逃れる。出来上がった作品は実にみごとだったが、その堂々たる公爵像は後ろに口バを連れていた。大笑いする村人。公爵はすこすこ館に引き返す。

序曲は無窮動の楽想の中、短短長のリズムを基調として前進するが、それとときおりシンコペーションによるリズムの肩透かしで混ぜ返す。ジグザグに下行する音形を境に、短短長を逆にした長短短のリズムのテーマが、長く引き伸ばされて登場する。その後、冒頭の音楽に戻り、静かな部分を挟んで一気呵成に曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1936～37年／初演：1938年2月22日、レニングラード／演奏時間：約5分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、フィールド・ドラム、シロフォン）、ハープ、弦五部

ショスタコーヴィチ

チェロ協奏曲 第2番 ト短調 作品126

円熟期を第5交響曲の“成功”でスタートさせたドミトリ・ショスタコーヴィチ（1906～75）は、30年ほど続いたその期間を、チェロ協奏曲第2番の作曲で締めくくった。ただしその区切りの付け方は、不本意なものであったに違いない。

声楽付きの交響曲第13番は、少なくとも1962年の初演では聴衆に歓迎された。作曲家に不運が訪れたのはそのすぐあと。ソ連当局が作品への批判の声を大きくし始める。作詞者は詩の書き換えを余儀なくされた。改訂後も反体制の疑いは晴れない。この“成功作”は以後の数年間、ほとんど再演されなかった。

当局の介入に忸怩たる思いを抱えつつ1966年、作曲家は次の交響曲に取り掛かった。楽譜を書き進めるほどに、音楽の比重はチェロへと傾いていく。この曲は最終的に、コンチェルトの体裁を取ることとなった。これが今日、チェロ協奏曲第2番として知られる作品である。

作曲から初演にかけても災難が続いた。5月の演奏会に身体の不調を押して出演したところ、そのプレッシャーにショスタコーヴィチの心臓が音を上げる。心筋梗塞で3か月の入院を強いられた。同年9月25日、自身の60歳の誕生日を祝うコンサートまでには、なんとか寛解。作曲時に技術的な相談に乗ってくれたロストロポーヴィチの独奏で、協奏曲は初演とあいなった。心臓の病から先、ショスタコーヴィチは晩年様式をとる時代へと入っていく。

ゆったりとした**第1楽章**が作品の幕開けを告げる。チェロが独奏だけあって響きの重心は低い。しかし重々しくはなく、内省的ながらどこか軽やかな楽想が続く。**第2楽章**は間奏曲のような短いスケルツォ。切れ目なく**第3楽章**に入る。冒頭のホルンによるファンファーレに独奏が呼応。以後、8分の6拍子の穏かな部分などを挟みながら行進曲が続く。最後はヨハン・シュトラウス1世のラデツキー・マーチ(!?)を合図に、行進の歩みを静かに止める。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1966年／初演：1966年9月25日、モスクワ／演奏時間：約33分

楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン2、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、タンブリン、トムトム、ウッドブロック、ムチ、シロフォン）、ハープ2、弦五部、独奏チェロ

ショスタコーヴィチ

交響曲 第5番 二短調 作品47

ショスタコーヴィチは1934年、オペラ〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉を初演した。この歌劇は大成功を収める。ところが36年1月28日、共産党機関紙『プラウダ』がこのオペラを取り上げたことで雲行きが怪しくなる。記事の見出しは「音楽ならざる荒唐無稽^{こうとうむけい}」。徹底的な批判だった。作曲家はその4か月後、交響曲第4番を書き上げたが、初演の準備中に実質的な上演禁止措置を言い渡される。

こうした中、ショスタコーヴィチは交響曲第5番を作曲した。完成は37年7月。本人は政治的危機を避けたい（ので二枚舌になっても当局の納得する範囲に楽曲を収める）。当局はこれ以上、文化政策に波風を立てたくない（のでよほどのことがない限り作曲家の復権を演出する）。両者の思惑が作品上で均衡する。その結果、この交響曲は“好評”を勝ち取った。

「闘争から勝利へ」を地で行くような運びは、作曲家本人が話すように「楽観主義」的だ。その割には一筋縄ではいかない部分が多い。強烈な不協和音は体制批判か。終楽章でしつこく響くイ音は、愛人の名を連呼しているとも、「私」とつぶやいているとも。オペラ〈カルメン〉の引用もそうだ。先述の愛人は作曲家と別れた後、カルメン姓の男と結婚していた。実際はどうあれ、この交響曲では公私・裏表がすべて地続きになっている。

第1楽章にこの作曲家独特の筆運びを見る。楽句が雪のようにつもり、徐々に厚みを増す。堪えきれなくなった響きは雪崩^{なだれ}を起こす。それはやがて融けて地面に染み込んでいく。**第2楽章**のスケルツォは前楽章から主題を引き継ぐ。細かくパート分けされた弦楽群が、水墨画のように濃淡を変化させる**第3楽章**を経て、まるで反転攻勢と言わんばかりの**第4楽章**へ。こちらも冒頭楽章同様の筆運び。指揮者ロストロポーヴィチをして「恥ずかしい」と言わしめた“ベタ”な結尾部で明確に長調となり、仰々しく曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1937年／初演：1937年11月21日、レニングラード／演奏時間：約44分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、エスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、シロフォン、グロッケンシュピール、銅鑼）、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦五部

8/28

土曜マチネー

8/29

日曜マチネー

Program Notes

モーツァルト

歌劇〈フィガロの結婚〉序曲

伯爵のお屋敷に勤める従者フィガロと召使いのスザンナが結婚することになった。ところが、女好きの伯爵は若いスザンナに興味津々。廃止されたはずの“初夜権”を復活させようとたくらむ。これに気づいた二人は伯爵夫人も巻き込んで、不屈な伯爵を懲らしめる——騙し騙され、のどパタ劇が軽快に進んでいくオペラが、〈フィガロの結婚〉である。

原作はボーマルシェのフィガロ三部作の、〈セビリアの理髪師〉に続く第二作（第三作は〈罪ある母〉）だ。すでにパイジエツコによってオペラ化された〈セビリアの理髪師〉は、本作初演の3年前にウィーンでも上演されていたので、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）と台本作者ダ・ポンテはこれに続こうと考えたのであろう。根底に貴族批判の精神を持つ原作は、当時各地で上演が禁じられていたが、本作は娯楽色を強調した台本と鮮やかな音楽化によってウィーンやブラハで成功を収めた。

モーツァルトはオペラ中の素材を用いたりすることで、序曲を本編と緊密に結び付けようと試みてきたが、この序曲はオペラ本体からは完全に独立している。にもかかわらず、曲の表現しているものが作品の本質を突いているのには驚かされる。ファゴットと弦ががさごそと動きながらとぼけたテーマを歌いだし、豪快なトゥッティがすぐにそれを吹き飛ばす。弦のトレモロが生み出す弾むようなリズム感、強弱の対比や漸次的なクレッシェンドが、はらはらどきどき、面白おかしいこのオペラへの期待感を高めていくのである。

7月の《マチネー》ではロッシェニ〈セビリアの理髪師〉序曲が取り上げられた。稀代のキャラクターを、それぞれの作曲家がどう表現したのか、比較しながら聴くのも面白いだろう。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1785～86年／初演：1786年5月1日、ウィーン、ブルク劇場／演奏時間：約4分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク

ヴァイオリン協奏曲 イ短調 作品53

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）はブラハ近郊の小村で、音楽好きの父親のもと、宿屋・居酒屋・肉屋を営む家庭に生まれた。幼少期から音楽の才を発揮、青年期にはオーケストラでヴィオラを弾いていたが、やがて作曲の道を志す。オーストリア国家奨学金の審査員だったブラームスはその才能を見出した頃にはすでに30代半ば、立派な作品を次々と書き下ろしていた。

こうして訪れた充実期に、ブラームスの畏友ヨーゼフ・ヨアヒムの依頼により作曲されたのがヴァイオリン協奏曲である。1879年7月から9月にかけて作曲され、ヨアヒムのアドヴァイスを入れて80年と82年に改訂された。本作はヨアヒムに献呈されたものの、ヨアヒム自身は82年11月にベルリンで試演しただけで、公開では演奏していない。形式的なユニークさが保守的なヨアヒムの腑に落ちなかったのかもしれないが、チェコの風土色を反映した豊かな歌謡性を帯びた名品、というのが後の歴史の評価である。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ オーケストラの決然とした序奏の後、ヴァイオリンがすぐにラプソディックな主題を示す。曲はもっぱらこの素材を展開し、副次的な主題も現れるものの明確な対比にはならず、再現部も簡素で、ロマン派の形式感が^{かんこつだった}換骨奪胎される。短いカデンツァを経てそのまま第2楽章に入る。

第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロツポ 管弦楽のたゆたいの中で独奏が夢幻的な音の綾を織り上げる。木管が物憂いメロディーを歌うと、独奏がロマ風の情熱的な動きで絡み、ホルンのこだまを伴って激しい情感の発露となる。

第3楽章 フィナーレ：アレグロ・ジョコーソ・マ・ノン・トロツポ ロンド形式。シンコペーションによってアクセントの位置を変えるポヘミアの舞曲フリアントのスタイルで快活に始まる。中間部はスラヴ民謡のドゥムカとなって流麗な旋律を歌う。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1879年、1880/82年（改訂）／初演：1883年10月14日、ブラハ／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

※ベートーヴェン：交響曲第5番〈運命〉の楽曲紹介は15ページをご覧ください。

8/28

土曜マチネー

8/29

日曜マチネー

Program Notes